

ことばの意味とところ

言葉の吟味

“危機一髪”は正しいか

この言葉は、『髪一本入れる余地しかないほどに危険が身に迫っている』ことを表したものですから、“危機一髪”と書かなければいけません。

テレビ映画に“危機一髪”という題名をつけた映画がはやったことがあり、そのためにこう書く誤りがふえましたが、これは“危機一髪”と、“一発打開”する意味とを兼ねた、“もじり言葉”ですから、勿論正しい使い方ではありません。

さて、危は、人（ㇿ）が崖の上に立つ形で、“危ない”ことを表した字です。機は“わずか”の意味の幾と木で、「わずかの木で作られているが、大きな働きをする」機械を表したものです。

機は、大きな働きをする所から、“大事が起こるとき”を“時期（チャンス）”と言い

ます。幾は「わずか」の意味の么（系の先端の象形）と戍（戈と人の会意時で兵士を表した字）とで作られた字で、『わずかな兵士で守る』意味から「危険」が本義の字です。しかし、単に「わずか」の意味に使われることが多く、「機」の場合もそうです。

発の本字は發で、弓と發（ハツ）の形声字で、

弓を發射する「」ことを表した字です。弓を

「はなつ」「いる」のが本義で、「一発」は

『弓をぱっという』ことを表した言葉です。昔

は弓が最も威力ある武器でしたから、「一発」

でも威力がありました。

髪は、長い髪の形を表した「長」と「𦘒」と

の会意字「𦘒」と「友（ハツ）」との形声字で

す。頭の毛を「髪」、鼻の下の毛を「髭」、あ



ごひげを「鬚」、耳ぎわの毛を「鬚」、ほおひげを「髯」と言います。次の熟語も誤り易いものです。どちらが正しいか。考えてみて下さい。

一陽来復——一陽来福。五里霧中——五里夢中。

無我夢中——無我無中。絶体絶命——絶対絶命。

タンケンは探検か探険か

今ではたいていの辞書が、この二つの書き方を両方とも掲げていて、どちらでも良いことになっていますが、厳密に言いますと、「探検」でなければならず、この言葉はぜひ常にこう書いてほしいものです。兎の本字「兎」は人（シュウ）と田（ケン）と从（シュウ）

とで作られています。人は、会や合や命の冠で、古い形は亼です。これは衆の本字「衆」や集の本字「𡵓」を記号化した形で、人や鳥や物のたくさん「集まる」ことを表した部首です。𡵓は、人が口々に意見を述べることを表しています。だから𡵓は、『会に集まった人が口々に意見を述べること』を表しています。だから𡵓は、『会に集まった人々がそれぞれ意見を述べ合って、良い結論を出すこと』を表した字です。つまり、「多くの物事についてよく吟味し、良いものを選び出す」意味の字です。だから、人と兪とで作られた「兪」は、人が生活の仕方をよく吟味し、無駄のない合理的な生活をすることを表し、馬と兪とで作られた「駮」は、多くの馬の中から駿馬を選ぶべく「ためす」ことを表しています。さて、「検」の木は「木簡」を示し、昔の記録のことです。多くの記録を「しらべ」て、唯一の事実を突き止めることを表した字です。だから「検事」のように使います。探検とは「探りしらべる」ことです。探検しなければなりません。険の𡵓は、崖の形を表したもので、崖の意味の部首です。だから険は、多くの崖の中でも最も崖らしい崖、つまり



「けわしい」「危険」な崖を表した字です。だから、「冒険（危険を冒すこと）」というように使います。探検には、危険を冒す冒険的な行為を伴うことがあるため、冒険と混同されて「探検」と書き誤ったものと思われます。ところが、これを『危険を探ること』だとこじつける意見があります。しかし、これは造語上無理なこじつけと言わざるを得ません。「探り検べる」で「探検」と書かなくてはなりません。

施行はシコウかセコウか

施行は「実際に行う」という意味の言葉でシコウと読む言葉です。よくセコウと読む人がいますが、よくありません。

そもそも漢字の読み方には、普通、漢音と呉音の二通りがあります。例えば、**教**は漢音がケイ、呉音がキョウ（他に特殊な音としてキンがあり、唐音と呼ばれる）です。初め漢字は、中国の南部、呉地方からわが国に伝わり、この地方の発音を基にした読み方が広がりました、その後、聖徳太子が中国と正式に国交を結ぶようになりますと、都・長安の発音が我が国に広がり、これが標準音という事で、**漢音**と呼ばれ、それまでの読み方を**呉音**と呼んで区別するようになりました。

呉音は古くなじみも深いので、絵（エは呉音、漢音はカイ）のように音が訓か区別でき

ないものがあり、また、仏教用語にも用いられています。後生、強力、精霊、利益がこれで、これを（コウセイ、キョウリョク、セイレイ、リエキ）と漢音で読みますと、意味がやや違ってきます。



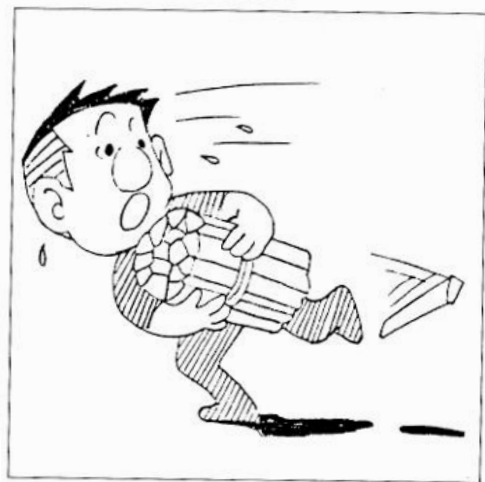
施は漢音がシ、呉音がセ。行は漢音がコウ、呉音がギョウです。ですから、施行は漢音ではシコウ、呉音ではセギョウ（仏教用語で人を憐れんで物を施したり教えるを施すこと）と読みます。セコウでは、上が呉音、下が漢音という事になり、ちぐはぐでいけません。施という字は、今は「ほどこす」という意味に使われますが、旗の意

味の「ガ」と蛇の原字であり、蛇の形を表した「也」とで作られた字で、風に吹かれると蛇のようにうねうねとうねる旗、紐のような旗を表わした字です。也の音は蛇と同じダ、ジャで後にやとなりました。孝子也が『孝子なり』と訓読されますが、現代語では『孝子だ』『孝子じゃ』『孝子や』です。太字は訓だと思いませんか。音だと思いませんか。

早い電車と速い電車

速は、薪にする木を「たば」ねた形の束（ソク）と、道路を表した「𨔵」と足の下半分との合字の「道を進む」意味の「進（進）よう」とで作られた字です。速の音のソクは束によります。

木は一本一本運ぶよりも、束にして運んだ方が「はやく」て「時間がかからない」こと
から、一定の道のりを進むのに、「時間がかからない」事、つまり「はやい」事を表した
ものです。だから、「速い電車」とは、乗っている時間が少なくて済む、スピードのはや
い電車のことです



早は、地平線上に太陽が姿を現した形で、
旦と同じく「早朝（朝を前、中、後と分け
てその前の方）」を表した字です。転じて、
朝に限らず、「その時期のはやいこと（前
の方）」を表すのに使います。「早い電車」
とは、朝早く出る電車のことです。

速の反対は遅（本字は遅）で、早の反対

は晩です。犀さいは牛に似て足の遅い動物ですから、犀が進むのに時間がかかるので、「時間がかかる」「おそい」事を表しました。音はサイが促つまってシになり、それがなまってチになりました。

晩は、日まぬがが免れる日まぬがが沈む頃を表した字です。早の朝に対して、晩は夕方が本義の字です。だから「朝晩」というように、「朝夕」と全く同じ使い方をします。また、「その時期がおそい（後の方）」という意味に使われます。例、晩春（旧暦の一月、二月、三月が春で、一月を早春、二月を中春、三月を晩春といいます）。

今の漢字表には晩に「おそい」の訓がないため、晩を使うべきところに遅が使われますが、どうも感じが出ません。

「おくれる」という言葉を表すのに、「遅れる」と「後れる」とあります。「遅れて出発した」とどう違うか考えてみて下さい。

「勉強」べんきょうということ

日常何気なく、解ったつもりで使っている言葉の中には、よく考えてみると、正確に理解しているとはとても言えないものがあります。言葉を明確に理解することとは、物を正しく考えるためには最も大切なことです。とりわけ、話し合いにはぜったいに欠くことの出来ない重大事です。さて「勉強」については別項の「漢字に学ぶ」ところでもとりあげましたが、ここでは教育の角度から考えてみましょう。『勉強しなさい』とは、お母さんがよく使う言葉ですが、「学習」とどう違うでしょうか。商人もよく『勉強します』と言いますが、これとお母さん方の言う「勉強」とは同じ意味の言葉でしょうか。勉強は「責任を免れる」の「免」と、「努力」の「力」とを組み合わせた字で、『責任上しな

ければならない事から早く免れようとして努力する』ことを表した字です。強は『強制』の強で、『しいる(いやな事を無理にやる)』という意味がある字です。従って、『勉強』とは、『いやな事だが、しなければならぬ』ということだから、早く免れようと思い、がまんしてやる』という意味の言葉です。

てやる』という言葉の言葉です。



商人の『勉強します』は、この値段で売るのはいやな事だが、ほかならぬあなただからがまんして売なのだ、ということ。『いやな事だが、がまんしてやる』のが『勉強』の本義で、『好きな学習を喜んでやる』のは『勉強』とは言わないのです。

ところで幼児は決して『いやな事をがまんしてやる』ことをしません。だから、親が幼

児に不得意なことを勉強させたく思っても、決して成功することはありません。

それよりも、幼児の好きな事を十分にやらせていれば、いろいろな能力が育ちますので、やがて不得意な事でも『やってみよう』という意欲が起こって来るものです。こうして、『いやな事だががまんしてやる』という意欲を育ててやるのが大切だと思います。

“がくしゅう学習”ということ

前項で『物事を正しく考えるため』の言葉を吟味するために、『勉強』を取り上げましたが、今度は『学習』を取り上げることにします。

この言葉は、論語の冒頭の『学んで時にこれを習う。またよろこばしからずや』から生

まれたものです。『学習院 時習館』という校名もこれに由来します。

学を『まなぶ』と読みますが、古語では『まねぶ』と言い、それは『まね（真似）る』の古語でもあります。つまり、『まなぶ』とは、立派な言行に接してそれを真似ることなのです。習は『ならう』と読みますが、古語の『なる』の延音であり、それは『なれる』



の古語でもあります。つまり、『ならう』とは、慣れることであり、慣れるために『反復すること』です。幼児は真似の天才です。親の言行など、寸分たがわず真似るので恐ろしいくらいです。その上、反復することが大好きで、どうしても同じ事を飽きずに繰り返してやれるものか、全く不思議でならないほどです。

つまり、幼児は生まれつき『学習』が好きな

ようにできているのです。論語の『よろこばしからずや』の言葉通り、学習は本来楽しいものののです。ところが、その楽しいものも、他人から強制されますと、途端にそれが苦しいものになるのです。

学問でも登山でも、自ら進んでやるから楽しいのであって、よそ目には苦しく見えるものでも本人には楽しいものです。しかし、これを他人から強制されたらどうでしょう。苦しみは苦しみでしかなく、早く免れたいと思うばかりです。

だから学問は『勉強』させてはいけません。『学習』にしなくてはけません。前項にも言いましたように、『学習』により能力がつけば、不得意な苦しい事にも『やってみよう』という意欲が自然と湧いてくるものです。

あきら
“諦める”ということ

諦という字は、帝（天子）と言で作られていて、『天子の御言葉』という意味で、絶対

的な言葉、つまり『真理』を表した字です。

仏教に四つの真理という意味で、『四諦』^{したい}と

いう言葉がありますが、それが本義の字です。

この字を『あきらめる』と読んでいますが、

これは『明らめる』ということで、物事に隠

されている真理を見付け出し、引き出して

『明らかにする』ことですから、諦を『あき

らめる』と読むことは正しいと言えます。



しかし、一般には『とても見込みがない』として思い切る』という意味に使われています。

これは、この字の正しい使い方ではありません。とりわけ、『怠けていてとても合格しそ

うもないので受験を『あきらめる』』というのでは、全く『諦』と違ってきます。初め、

『人情としてとても思い切れないのだが、道理をよく考えてみればそれを望むのは正しく

ない。だから思い切る』というように使ったものでしょう。つまり、『真理が明らかにな

った結果希望を思い切る』のが『諦』だったのが、いつの間にか単に『思い切る』という

意味に考えられ、そう使われるようになったものと思われます。

だから、『真理を明らかにした結果、思い切るべきだ』と考えて思い切る』のが真の『諦め』

で、『努力が足りないため、見込みがなく思い切る』のは『諦め』とは言えないわけです。

ほんとの『諦め』は立派なことですが、努力がいやで思い切るという『諦め』は、言葉と

しても正しくないし、よくないことです。皆さんも、この誤った『諦め』はしないように努力していただきたいと思います。

この『諦め』と同じように誤って使われやすい言葉に『覚悟』という字があります。これも『真理をさとり明らめる』のが本義の字です。

はいすい じん

背水の陣

大変な覚悟の上で事に当たる時によく使われ、史記の淮陰侯（韓信）伝に見える言葉です。

秦が亡びて漢がこれに代わろうとしていた時代、漢の名将韓信は漢王の命令で趙王を攻めることになりましたが、味方の兵は数万なのに趙軍は二十万という大軍でした。

兵法では、山を背にし、川を前にして陣を構えるのが常識になっています。山を背にす

れば、負けて退いても敵の攻撃がしにくく、逆転のチャンスがあります。川を前にすれば、敵は川を渡って攻めなければならず、渡っている所を撃てば効果的です。

ところが韓信は川を背にして布陣したのです。趙軍はこれを遠くから眺めて、兵法知らずと笑いました。戦いは韓信の方から仕掛けましたが、負けたふりをして川の所まで退却させました。

趙軍は勝ち誇り、韓信を見くびって追撃して来ましたが、退却するにも退却できない韓信の軍は決死の覚悟で戦ったので、趙の大軍



を打ち破ることが出来ました。これが有名な背水の陣の故事です。

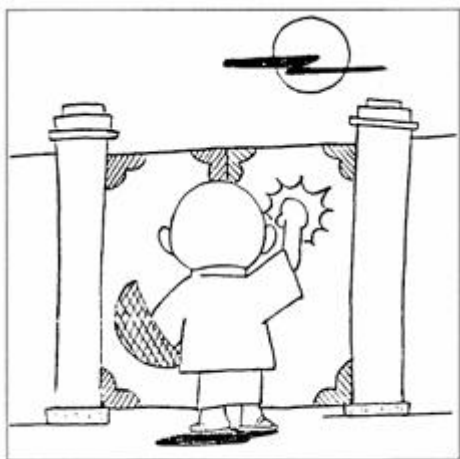
さて、背という字は、北と月とで作られています。元は「北」だけでした。「背」のよ
うに、人が背中合わせに座っている形を表したもので「背中」という意味を表しました。
後にこの字が方角の「きた」を表わすのに使われるようになり、区別するために肉月を加
えて今の字になりました。人は太陽のある南に向く傾向があるので、背中は「きた」を向
く、ということで、背中を表す「背」が「きた」の意味に使われたものです。「北」は、
敵に背を見せて「にげる」という使い方もあります。「敗北」という言葉がそれです。つ
いでに「比」という字は、二人並んだ形なので、「ならぶ」（例・比翼）「くらべる」（例・
比較）という使い方もあります。

推敲すいこう

詩や文章の字句を苦心して練り直すことを表した言葉ですが、「敲」が常用漢字にな

いたため「推敲」という書き方をされるようにな
りました。しかし、漢字の意味から考えてこ
れではおもしろくありません。唐の詩人として
有名な賈島かとうが、長安の都の大通りを驢馬に乗っ
て歩きながら詩を作っていました。『僧は推
す月下の門』という句を作りました。

しかし、よく考えますと『僧はたた敲く月下の門』



とした方がよいような気がします。推がよいか敲がよいか、賈島は身振りでこれを表しながら、考えましたが、考えれば考えるほど迷ってしまいます。

『無礼者め!』という声に賈島が驚いてあたりを見回しますと、都知事の行列に突き当たっていたのです。その知事というのが、大文章家としてその名も高い韓愈(韓退之)でした。賈島から訳を聞いた退之は、『敲の方がよい』と教えてやった、ということです。そこで、詩や文章の字句を苦心して練り直すことを『推敲』というようになったのですから、いかに『すいこう』と読めても『推考』ではおもしろくない訳です。

『推』は、手でおすことです。佳はスイという字でこの字の発音を示しています。才が意味を、佳が発音を示す、このような作り方の字を『形声字』といいます。

『敲』は、高がコウという発音を示し、支が意味を示しています。支は『ト』^{ばく}のようにと呼ばれ、『攴』(政や教や牧の右の部分)の古い形です。『攴』が手の形を表し、手に棒、

鞭などを持つことを表しています。『考』は老と^こ𠂔の形声字で、老人の『かんがえ深い』ことを表した字です。

敬遠^{けいえん}

『敬遠』という言葉は、嫌いな人があってその人に近づくことを避ける場合にこれを使いますが、本義はちよつと違います。この言葉は、論語の『鬼神を敬してこれを遠ざく、知というべし』という孔子の言葉に由来するものです。

鬼とは、死んだ人の魂。『靈魂』のことを言います。今では『おに』と読んで、赤鬼・青鬼など、角を持った怪物の意味に使われますが、『魂』の右の部分が示すように、鬼は

『靈魂』が本義です。

孔子の言葉は『死んだ人の靈魂や神様に対しては、十分に尊敬してなれなく近づいてはならない。それが実践できる人は知者と言ってよい』という意味です。

心から尊敬する偉人に対しては、近づきたいという思いは強くても近づきにくいものです。敬遠とは、尊敬のあまり近づきたいことを表した言葉なのです。

その後、『表面上は尊敬するような態度に見せかけて、その実は嫌いなので近づくことを避ける』場合にこの言葉を使うようになりました。

つまり、『嫌いなので近づかない』のを、『尊敬の余り近づかない』というように見せかけるわけです。今では、全く、『嫌いだ』ということの婉曲な表現として使われることが多くなりました。

例えば、『〇〇先生は生徒から敬遠されている』と言えば、『生徒に嫌われている』という意味であって、尊敬されている意味は全くななくなっています。



ただ、野球の解説で、『敬遠のフォアボール』という表現がよく使われますが、これなどは強打者の威力を恐れて遠ざけるわけですから、まずまず『敬遠』の本義に近い使い方をしたものと言ってよいでしょう。

五里霧中

ごりむちゅう

この言葉は、よく誤って『五里夢中』と書かれますが、これは『霧中』でなければなり



ません。なぜかと言いますと、『深い霧の中に
あって方向を見失い、どう進んだらよいのか途
方に暮れる』という意味の言葉だからです。
後漢書という書物の張楷伝に、『斐優とい
う人は三里霧を起こすことが出来たが、張楷は五
里霧を起こすことが出来た』と述べられていま
す。

わが国で、霧隠才蔵が忍術を使って霧を出し
たと言われていますが、張楷という人は道術を好み、その術によって五里四方にわたり霧
を起こすことが出来た、ということです。

それで、迷って方針や見込みが立たない場合、張楷の妖術による『五里霧（ごりむ）』

の中に迷い込んだようだ、と譬えて表現したものです。

さて、『里』は『田』と『土』との会意字で、『田あり土ある所は人の集まり住む所
である』という意味で『村』『ざと』を表した字です。

中国では、時代によって、二十五戸を『里』と称したこともあり、五十戸、また百戸を
里と称したこともあるなど、行政区画の名称に使われました。

ここでは『長さ』の単位としての里ですが、これも時代によってかなりの差があります。
穀梁伝に、『昔は三百歩を里とし、今では三百六十歩を里としている』とあります。

わが国では、昭和の初めまで『約四km』の距離を表す『長さ』の単位として使われてい
ました。

夢中と霧中

むちゅう むちゅう

『無我夢中』は、無我につられて無中と書き易いようですが、我を忘れた無意識の状態を『夢の中』のようだ、ということで作られた熟語ですから、これは『夢中』でなければなりません。

『五里霧中』は、前項で取り上げ、精しく説明しました。五里四方に霧を起こして人を暗ます妖術を『五里霧』と言い、その霧の中にあつてどうしたらよいか、判断のできないことを表した言葉です。だから、これは『夢中』ではないのです。

ただ、五里霧中は、無我夢中と同じく、『はつきり判断できない状態』を表した言葉です。ので、取り違え易い要素があります。よく意味を考えて正確に理解しておく必要があります。

『一陽来復』は、『良くない事が長く続いた後で良いことが回ってくる』という場合に使われる言葉ですから、『幸福が来る』という意味に考えられ、そのため『一陽来福』と書き誤るおそれのある言葉です。

『陽氣が回復して来る』という意味の『易』の言葉ですから、『来復』でなければいけません。

『絶体絶命』は、追いつめられて、逃げおこせる見込みがなく、『体を断ち、命を絶つ』というような大変な状態を表した言葉で、『絶体』と『絶命』は対になる同義語です。『絶対』というよく使われる熟語があり



ますので、つい『絶対絶命』と書き誤り易いようです。

『單刀直入』と『志操堅固』は、『單刀』と『志操』という言葉が一般に使われず、『短刀』『思想』という言葉がよく使われているため、書き誤り易いものです。

驥尾に付す

『才能のない者が、優れた先輩の後に付き従ったお陰で、立派な仕事を成し遂げ、また出世する』という意味の言葉です。

史記の伯夷伝に、『顔回は篤学ではあつたけれども、驥尾に付してそのお陰でその事実が一層明らかになった』という意味の言葉があり、それがこの言葉の出典です。驥とは、一日に千里を走る駿馬のこと、ここでは孔子を指しています。



また、後漢書に『あおばえは数歩の距離しか飛べないが、驥尾にくつついて行けば、千里の先にも行ける』とあって、これがこの言葉の文字通りの意味です。数歩の距離しか飛べない蠅でも、駿馬のしっぽにくつついていれば、駿馬と同じ距離を進むことができる、という訳です。

驥と同じ意味の字に『麒麟』や『麟』や『駿』があります。

尾は、尸と毛とで作られた字です。尸は、人のように人が椅子に寄り、体をのびのびさせた形を表したもので、『人』という意味に多く使われます。

屋は『人の至る所』つまり家屋を表したも

のです。尿は『人体から出る水』つまり小便を表したものです。尿は『人体の出す米』つまり大便を表した字です。

居は、尸が『椅子に寄っている』意味を表し、古はㄱ(呉音)もしくはㄱ(漢音)ㄱという発音を表し、形声字です。

さて、尾は、説文によると、昔の人は鳥の羽毛を飾りに背中から下に付けて垂らした、その飾りが『尾』だとあります。獣のしっぽのように見える所から、この字が『しっぽ』を意味するようになったということです。

唯我独尊 ゆいがどくそん

言葉の意味は『ただ我ひとり尊し』ということですから、傲慢な態度を表わす言葉、ㄱ

ぬばれ』とか『ひとりよがり』というような意味に使われます。

しかし、この言葉は、お釈迦様が誕生された時『天上天下唯我独尊』とおっしゃったという伝説によるものですから、そんな『ぬばれ』や『ひとりよがり』の言葉であるはずがありません。それは、『この世の中には、自分より他に衆生を救うものはいないのだ』という『使命感』決意を表した言葉だと考えなければなりません。それは『自信』ではあっても、他人を軽蔑する『傲慢』とは異質のものです。

二宮尊徳翁の高弟、福住正兄が翁の言葉を記録した『二宮翁夜話』という書物に、翁の言葉として、次のような意味のことが述べられています。

『天上天下唯我独尊という言葉、お釈迦様の傲慢だという者があるが、これは誤りである。この世の中の人は誰でも『ただこの自分だけが尊いものだ』という自覚を持つことが大切だということを教える『教訓』の言葉である。もしも、この世の中に自分が存在し

なかったら、この世も、万物もすべて無いのに等しいことになる。このように、自分というものは貴重な存在なのである。犬も唯我独尊である。鷹も独尊である。猫も杓子も独尊である。……』と。



なるほど、猫は鼠を捕ることで独尊、杓子のご飯を盛ることで独尊です。だから、人間として生まれた以上、必ず何かしら独尊を言えるものを持っているはずで、その独尊と言えるものをわが身に発見し、自覚することが教育の基本だと思います。

この「独尊」の自覚ができれば、自分を汚すような行為は決してなくなるばかりか、その

独尊と自覚する点にいよいよ磨きをかけて、より一層の向上に努力することでしょう。

学問 がくもん

学問という言葉は、「学習」の学と、「疑問」や「質問」の問という字とで作られた字です。

それは、学習を重ねていきますと、必ず理解しかねる点や疑問が出て来るものであり、これを先生や先輩に質問して納得のいくまでこれを追求する必要があります。この「学習」から「疑問」をただすまでの過程を「学問」と呼んだものです。

ところで、論語に『学んで思わざれば即ち暗し、思いて学ばざれば即ち危し』という言葉がありますが、学習したことについては、疑問をただすことは勿論ですが、その上さら

にいろいろな角度からこれに検討を加え、とことん納得のいくまで思考することが大切です。

このことを「慎重に思考する」という意味で「慎思」と言い、慎思した結果の納得できた状態を「明辨」と言います。このように、学問して得た知識も、慎重な思考や検討を経

て初めて自分の血肉となり、生きた働きをするのであって、こうなった状態を「明るい」というのに対して、そうならない状態を「暗い」と言っているのです。

このように「思考する」ということはとても大切なことですが、ただ思考するだけで学問をすることを怠っていますと、とかく独



断偏見に陥り、狹量な人間になってしまう恐れがあります。それで『思いて学ばざれば危うし』、危険だと孔子は警告しているのです。学問とは、学習していく過程で生ずる疑問をただすだけにとどまらず、これに十分な思考を加えて明らかに理解するまでを称した言葉ですから、学問に志す人はぜひここまでやってほしいものです。

講義の聞きっぱなし、本の読みっぱなしではなくて、疑問を持ち、自分の頭でこれを批判検討し、納得のいく結論に達するまで追求してやまない、それがほんとの「学問」だということをお忘れなくください。

こそく 姑息

姑息という言葉は、『姑息な手段を弄する』というように使われて、「その場逃れ」と

か「一時の間に合わせ」というような意味を表す言葉として使われていますが、「姑」は「じゅうとめ」、つまり、夫（妻）の母を指す言葉であり、「息」とは「息子」のことであり、「姑息」は本来「女子供」という意味の言葉です。

礼記という古典に、『君子は人を愛するに徳を以てし、細人（小人）は人を愛するに姑息を以てす』とあります。君子の愛が徳に基づく真の愛であるのに対して、小人の愛は「女子供の愛」だと言っているのです。

論語に「女子と小人は養い難し」とありますように、女子と小人とはともに思慮が浅く、大局的な判断が出来ず、一時逃れの衝動的な行動をするので、小人の愛を「女子供の愛」、つまり「姑息の愛」と表現したのでしょう。

こう言いますと、女子を軽蔑すると立腹されますでしょうが、男女の特性を比較してみますと、総じて女性の方が感情的で、情に流される傾向が強いので、大局的判断に欠けや

すいことは否定できないと思います。

例えば、子供がしつこくねだりますと、それが子供のためにならない要求であるのに、これを許すということがよくあります。これなど正に「姑息の愛」と言えましょう。ただ、

この頃の父親は、大変に女性化していて、甘い点では女親に変わりませんから、「姑息の愛」という言葉は今ももう当たらなくなっているかも知れません。

ともあれ、親たる者は一時的な感情に溺れることなく、大局的な判断に基いて、子供のためにならない要求は断固として退けるばかりでなく、悪い要望を抑制できるだけの忍



耐心を養い育てるための工夫と努力を惜しんではならないと思います。

不肖 ふしょう

『不肖』の『肖』という字は、『小』と『月』とで作られていますが、この『月』は『肉月』であって、昔は『肉』という字でした。つまり、『小さな肉』という意味の字です。この字の『シヨウ』という音は、『小』が表わしています。

子は親に比べて肉体こそ小さいが、その姿形から性質・能力にすべてが実によく似ています。それで、『形は小さいけれどもよく似ている』という意味を表したのが、この『肖』という字です。『肖像』『肖像画』という使い方がこれです。

『消』という字は『水の流れが小さくなる』という意味で、『水の勢いが弱まる』ことを表した字です。今では『火の勢いが弱まる』意味から、『火が消える』火を消す(消火)『』というように使われています。

『硝』という字は、水を加えると溶けて小さくなる石、つまり『硝石』を表した字です。『削』という字は、『刀(リ)で削って小さくする』という意味の字で、『削る』という言葉を表しています。

『肖』という字は、家の中の人が皆同じように(似て)見える『日暮れ時』を表した字です。『宵闇』よいやみというように、人を識別しがたい『暗さ』のこもった言葉です。さて『不肖』は『親に似ない』という意味の言葉です。それは『親に似ない愚か者』ということですが、『愚か者』の意味に使われるようになりました。

孔子の言葉に、『道の明かならざるや、我これを知り、賢者はこれに過ぎ、不肖者は及ばざるなり』とあります。ここでは賢者に対して不肖者と言っていますので、明らかに『愚



か者 という意味です。

しかし、普通には、『彼は不肖の子だ』という使い方や、『不肖私は……』というように、自分を謙遜して言う使い方が多く、またこれが正しい意味での使い方であると思います。

五十歩百歩

この言葉は、どちらも似たりよったりで、大した違いがないことを表す時に使われる言

葉です。

昔（紀元前三、四百年頃）中国の戦国時代に魏という国がありました。この国の王様恵王が孟子に向って、『先生は、仁政を施せば天下の人民が慕い寄って来て、国は自然と

富強になる、と教えて下さったので、私もど

この国の王よりも民政に心を配ってきたつもりである。しかし、一向にその効果が見えないのはどういう訳だろうか』と尋ねました。

すると、孟子は、『戦場で逃げ出した兵が、

一人は五十歩で踏み止まり、もう一人は百歩で踏み止まった。五十歩で踏み止まった兵が

百歩で踏み止まった兵を臆病者と言って嘲



笑したら、王様はこれをどう思うか』と反問しました。

恵王が『それはおかしい。二人とも逃げたのだから、五十歩での百歩でも同じことだ』と答えますと、孟子はすかさず『王様は善政を行っているつもりでも、よその国の王様と五十歩百歩の違いに過ぎないのですよ』と言って、恵王の発奮を促しました。これがこの言葉の起源です。私どもはこの恵王のように、大した努力をしたのでもないのに、他人よりよほど努力したつもりになり、大きな期待をしがちです。自分の努力の苦勞は身にしみて感じ、他人の苦勞は少しも感じません。だから、自分の努力を過大に評価してしまうのです。恵王を笑ってばかりはいられません。

さて、百という字は、親指の形を表した白と一との合字です。私たちは数を指でよく示しますが、昔は親指で十の十倍を示しました。それで白ひやく（漢音はく）が今の百の数を表す字になりました。百はひゃく一白という字でしたが、色の白と区別するために、数の白を

百と書くようになりました。

助長じょちよう

助長とは、辞書に「能力を伸ばすように助けること、また、ある傾向や性質などを発達させること」とあって、一般にそういう意味に使われています。

しかし、自分では、我が子の能力を伸ばすつもりで手を貸していることが、逆にわが子の成長を妨げている、という場合が少なくありません。助長とは、実はそういう手助けを言った言葉なのです。出典は、四書の一つである孟子です。『宋という国に、自分の畑の苗が成長しないのを心配して、その成長を助けるつもりで、苗を一本一本引っ張って回った者がいた。へとへとになって家に帰り、家人に向って言った。『今日は疲れた。わしは、

苗の伸びるのを手伝ってやった(われ苗を助けて長ぜしむ)それを聞いて驚いた息子が、走って行って見ると、苗は枯れてしまっていた』という寓話の中にある言葉です。

子供が自分の頭を使って考え、行動することが、その能力を伸ばすのに最も役立つものです。その反対に、子供に一々指図してやらせることや、手を貸してやることは、子供の



成長を妨げることになるものです。ところが、この成長を妨げる『助長』をやっている親が、世には多いものです。助長は親の自己満足だけで、有害になることが多いものです。助長しようという場合は、よくよく考えてみるのが大切です。

助は、地上に同じものを三つ積み重ねた且しよと

力の合字です。『力を積み重ねる』という意味の字で、『助力』つまり『助ける』ことを表わしたものです。

組は、いろいろな糸を重ね合わせて一本の紐を作ることを表した字です。このことを『紐をくむ』と言い、紐を『ぐみ紐』と言います。また、いろいろな人を集めて一まとめにすることを『ぐみ』と言つようになりました。

他に、祖・租・粗・疽・阻などがあります。

羊頭狗肉ようとうくにく

看板に羊の頭を掲げておきながら、実際には羊の肉ではなく、犬(狗)の肉を売るという意味のことで、見せかけだけで実質の伴わないことを言うのに用いる言葉です。

られました。

かなえ けいちよう と
鼎の軽重を問う

鼎とは三本足で二つの取っ手のある、物を煮る道具です。中国古代の聖王とされる夏王朝の始祖、禹王が九州（中国全土）の青銅を集めて九つの鼎を作り、これを王位継承の宝器とした、と言われ、この鼎が次の殷王朝に、さらに続いて周王朝に受け継がれました。それで、天子が国を統治する大業を「鼎業」と呼び、天子が都を定めることを「鼎を定める」と言うようになりました。

さて、周王朝・春秋時代（紀元前六百年）、天子と同じ「王」を僭称した楚国の荘王が、天下を奪い。鼎を奪う下心から『鼎の重さを尋ねた』という故事がありまして、この事が

ら『現在の権力者に対してその実力を疑い、これを軽視する』こと、また『権力の交替を迫る』事の譬えに使われるようになりました。

なお、鼎は三本足であることから、三者会談のことを「鼎談」、三者または三国の対

立を「鼎立」と言う言い方が生まれました。

次に中国では、「軽重・長短・大小」というように、反対語を並べて「重さ・長さ、大きさ」を表します。ところで、この頃「厚さ（厚薄）」のことを「薄さ」という言い方がよく見られます。時計や電卓の薄いことを強調するために、『薄さ〇〇ミリ』などと表現するのですが、正しくはどんなに薄くても



『厚さ〇〇ミリ』と表現すべきものです。『薄さ』という言葉は『厚さは僅かに〇〇ミリ。この薄さ』というように、使うことはありません。

軽という字は、『径（小みち）を通ることの出来る車』という意味の字で、軽車（今の軽自動車）という言葉の言葉です。軽車は『軽い』ので現在の使い方が生まれました。重という字は、妊娠した婦人が土の上に立つ姿を表わしたもので『身おも おもい』という意味の字です。